
sWEet my LIFE

おっ茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s W E e t m y L I F E

【Nコード】

N 4 6 4 4 P

【作者名】

おっ茶

【あらすじ】

両親が他界した中2以来、恋愛経験の無い高校1年生・井上美鈴。ある日、クラスの地味男子・井上悠に恋をする。友達いない同士の不器用な2人の恋の行方はどうなるの！？

(前書き)

小6の時に書いた作品です

駄文だらけですが、読んでみてくださいね♪

では、どうぞっ☆

ここは、住宅街。その中でも、ひととき目立つ、大きな家があった。
「お父さん、お母さん、行ってきます…。」

この家の住民、井上美鈴は、イノウエ・ミズ交通事故で、両親を亡くしている。

両親が残っていたのは、遺産と、一人で住むには広すぎる、大きな一軒家。

だから美鈴は、寂しさを紛らわせる為、猫を一匹買っている。

「行ってくるね☆マリ、お留守番よろしく」

「んじゃあ!」

美鈴は高校1年生。親の事で頭がいっぱいで、中2の頃から、恋をしていない。

〈教室〉

美鈴が入って来ても、誰も話しかけてこない。

(やっぱり…今日も…)

美鈴は高校入学直後に両親を亡くし、用事がいっぱい休みがちだった。

そして、友達を作りそびれてしまったのだ。

「次、移動教室だって! 早く行かなきゃ理科の本田先生に怒られる!」

「行こ行こー!」

移動教室も美鈴は常に一人。

だが、美鈴はいじめられているわけでも無く、逆に、美鈴と友達になりたいと思っている人も多からずだが、いる。

だが、美鈴は超がつく程『口ベタ』で、それプラス、長い黒髪に整った顔立ち、クールな表情が、美鈴を、『近寄りがたい人間』にしているのだ。

ある日、美鈴はいつもの様に起床した。家の前のポストに新聞を取りに行った。すると、新聞の他にもう一通、手紙が入っていた。その手紙には、『井上悠様』と、書いてあった。

だが、この家にはそんな人は住んでおらず、ましてや、両親の名前でも無い。

だが、美鈴はこの名前に覚えがあった。

クラスの男子、井上悠だ。イノウエ・ハルカ

悠は美鈴と同じく、友達を作りそびれ、いつも一人で本を読んでいる。視界にも入らない様な、暗いヤツ。

美鈴はみじたくを終え、スクバのポケットにその手紙を入れ、学校に向かった。

教室

やはり、誰も話し掛けて来なかった。美鈴は『手紙を渡すぐらい』と思っていたが、ここに来て、自分の不器用さを思い出した。

「あ、あ、あの…あのさ、てて、て、手紙が、」

「ん？どうしたんですか？井上さん。」

「こ、これ！」

美鈴は、手紙を悠に投げつけ、急いで廊下に出て行ってしまった。

（ああ…。やっちゃった…。）

美鈴はひどく落ち込んだ。

（でも、落ち込んでもしょうがないし…）

美鈴はドキドキしながら、教室に戻った。

教室

美鈴がドアを開けた。すると、クラスメートの声が飛びかった。

「井上って、井上の事好きなのか？」

「さつき井上にラブレター渡してただろ！」

二人共、名字が一緒な為、よく分からない言葉を浴びせられた。

美鈴は何も言えず、男子達を見つめた。

「ひいイ！ご、ごめんなさい！」

美鈴は睨んだつもりでは無かったのだが、見た目の関係上、他の人には、美鈴が睨んでいる様に見えるのだ。

〽翌日〽

今日も、声を掛けられない…と、思っていたが、クラス的女子から声を掛けられた。

「井上さんって、クールな感じかと思ってたけど、恋する乙女なんだね！」

「あのさ、美鈴って呼んでいい？」

この二人はクラスメートの遠山奈津子と、杉本ちあき（スギモト・チアキ）だ。

「う、うん！いいよ！」

こうして、美鈴に友達が出来た。

「そういえば美鈴、さつき井上に、手紙投げつけたじゃん？謝んなくて、大丈夫？」

美鈴はハッとした。

そして、責任感の強い美鈴はこう思った。

『人様に、物をぶつけておいて、謝らないなんて…。最低！！』…と。

「井上君って、今、どこにいるかわかる？」

「うーん、文芸部の部室じゃない？」

「そう。ありがとう！」

美鈴は一階の文芸部部室まで猛ダッシュした。

〽文芸部部室〽

『ガチャッ』

「井上君!ごめんなさい!」

「・・・」

悠は唾然とし、返事が出来なかった。

「いいよ、別に。それに、『手紙』。ありがとう。」

初めて見せた悠の笑顔に美鈴は、ときめいてしまった。

ふと、美鈴はある事が気になった。

「井上君。文芸部の部員は?今日は来てないの?」

「・・・。部員は僕だけなんだ。」

「:そうなんだ。私は本、嫌いじゃないけどなあ。」

その言葉を聞いた悠は、片付いた机の引き出しから一枚の紙を出し、美鈴に差し出した。

「よかったら。」

それは、白紙の『入部届』だった。

〓4日後〓

「失礼します:。」

「あ、ありがとう!来てくれたんだね!井上さん!」

「う、うん:。ひ、暇だったし。」

「あのさ、井上さん、入部するなら、入部届を:。」

「ああ、持ってきたよ。:はい。」

美鈴は悠に、入部届を渡した。

「君が入部してくれて、嬉しいよ!ありがとう!」

「そんなに喜ぶ事かなあ?」

2人は次第に、自然に会話できるようになっていた。

ある日の事。

美鈴はいつものように、文芸部の部室に向かった。

「ちわっ！」

「こんにちは。」

「今日もいっぱい本読むぞ〜！」

「はい。頑張ってください！」

軽い会話をしたあと、美鈴は本棚から、本を選んだ。

そして本を手に持ち、悠の隣の席に座り、本を読み始めた。

（おお？この本、意外に面白い！）

美鈴は、『本が大好き』という訳では無いのだが、気の向くままに、文芸部に入った。

（ん？なんだ？この漢字。『憤慨』って、なんて読むの？）

美鈴は考え過ぎて、ページをめくる手が、止まってしまった。

「『ふんがい』。」

「…えっ？」

「ほら。」

悠は開いた辞書を美鈴に渡した。

よく見てみると、ある単語に赤ペンで線がひいてある。

その単語は、『ふんがい憤慨』。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

美鈴が本を読み進めていると、悠が言葉を発した。

「…美鈴。」

「えっ？」

「いや、あの、名字が一緒だから、呼びにくいし…。あの、その…、や、やっぱり、今の忘れて！」

「悠！」

美鈴は思わず呼んでしまった。

「わ、私、嬉しいから、『美鈴』って、呼んでいいよ、悠！」

美鈴は真っ赤だった。美鈴は恥ずかしくなり、下を向いてしまった。

「あ、ありがとう。美鈴…。」

美鈴が顔をあげ、悠の顔を見ると、悠の顔も赤くなっていた。

2人はお互いの顔を見て、笑ってしまった。

「あのさ美鈴！」

ちあきが美鈴に話しかけたので美鈴も「なあに？ちいちゃん。」と返した。

「美鈴ってさ、井上の事、好きなの？」

「・・・。」

美鈴は黙ってしまった。

「やっぱ、好きなんだ！」

「す、好きっていうか、気になるっていうか・・・」

「何何なあゝにゝ？何の話？教えて！」

奈津子も話かけて来た。

「なっちゃん・・・。」

「なんかさ、美鈴が井上の事、好きなんだってさ！」

「へえゝ！最近いい感じだしね！」

「・・・。」

美鈴は再び、黙ってしまった。

恥ずかしい気持ちもあるがそれ以上に、嬉しい気持ちでいっぱいだから、にやけてしまわない様、下を向いているのだ。

ゝ文芸部部室ゝ

「文芸部、『小説制作プロジェクト』、スタート!!!!!!!!!!!!!!」

「・・・はっ？」

「その名の通り、僕らが『小説』を、書くんだよ。」

「ええ?!私が?!無理無理無理!私、小さい頃から、作文とかダメだったし、センス無いって!」

「あのね、美鈴。」

悠は椅子に座った。

「僕、美鈴が嫌なら、させたくないんだ。だけど、美鈴のペースで進んでいけばいいんだし、チャレンジしてみない？」

美鈴はその優しさに心を動かされた。

「うん、分かった。私、書いてみる!!!」

その夜、美鈴は家で、小説を書き始めていた。

「えーっと…。次、どうしよう…。」

美鈴はなかなか上手に書けなかったが、悠の笑顔を想像すると、なぜか自然と、書けるような気がした。

ある日、いつもの様に、部室で2人で、小説を書いていた。

「悠が書いてるのって、冒険ものだね？ちょっと読ませて？」

「じゃあ美鈴のも見せて」

「そ、それは…」

「じゃあ月末にお互い見せ合いっこ！」

「・・・約束ね!!!」

実は美鈴は、自分と悠をモデルにした、ラブストーリーを書いていた。

『小説の中だけでも…』

こう思い、美鈴は物語の結末を『2人は結ばれた』と、書きたいと思っている。

（頑張るぞ…!）

美鈴はいつの間にか、小説を書くのが、楽しみになっていた。

美鈴はいつもの様に、部室で小説を書いていた。

しかし悠は、いつまでたっても、来なかった…。

（翌日）

「昨日はごめん！用事があった…」

「そっか。」

この日から、悠は時々、部活を休んだ。

そんな状況でも美鈴は、小説を書き続けた。

美鈴の小説が完成した日、悠が学校を休んでいた。

美鈴は心配になり、小説を持って、放課後に悠の家を訪ねた。

しかし留守なのか、応答がなかった。

次の日も、悠は学校に来なかった。

美鈴はその日も、悠の家に訪ねた。

『ピンポーン』

やはり応答がなかった。

「あの、井上さんに用があるんですか？」

悠の隣の家の住人が話しかけてきた。

「はい。そうですけど…」

「井上さんだったら、さっき、『引越しするから』ってタオルセ
ット持ってきましたよ？」

「！…それ…、本当ですか？」

美鈴は駅に向かった。

「悠…！」

美鈴が見つけた悠は、改札口を通る前だった。

「美鈴…。」

「なんで、言ってくれなかったの？」

「…。。頑張ってる美鈴を見ると言えなかった…。ごめん…。」

「…ほら！小説読んでよ！」

「…今は読めない。」

「…。。。」

「今の僕には、美鈴の小説を読む資格無いんだ。」

「…。。。」

「だから、いつか戻って来て、読むよ。必ず会えるから…。」

「…必ずねっ！。」

「sweet my lifeか…。」

「いいタイトルでしょ？」

「うん。楽しみにしてる。」

こう言って、悠はホームへ消えてしまった。

『好き』は言えなかったけど、心の中は嬉しい気持ちでいっぱいになった。

たとえ1人でも、一生懸命歩いて行くよ。

だから見ててよね？

『s
w
e
e
t
m
y
l
i
f
e
』

(後書き)

どうでしたか？

私は銀魂の小説も書いてますので、そちらも是非ともご覧下さい
！！

コメント頂けると、幸いです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4644p/>

sWEet my LIFE

2010年12月13日01時39分発行